

ライトノベルは

格差社会をいかに描くか

中西新太郎

〈子どもたちは格差の現実を知っている〉

いわゆる「やおい」というジャンルに少女たちが興味を持ち出すのは中学生時代。小学校高学年からの読者もかなりの程度にのぼる。男同士の恋愛・性関係を楽しんで読む小学生が想像し難いなどと言っではいけない。現代日本の子どもたちは、この時期にもう、「社会」人として生きる想像上の経験を積んでゆくのだ。

「子ども向け」という文化の限定は、それだから、簡単にはできないし、してはならない。筆者が構造改革時代と呼ぶ一九九五年以降、格差や貧困、差別の「現実」を描いたライトノベル作品は、サブカルチャーの世界では珍しくもない。ライトノベルやいわゆる青春小説、マンガなど、このジャンルの作者の多くは若年層であり、自らが生きる世界と同世代の心情をいちはやく感じとって反映させる。時代と無縁に恋愛物語だけを育んでいるわけではない。また、大人たちがしばしばそうするように、若い頃の「貧乏」を

懐かしんでノスタルジアに浸るのでもない。そんな余裕はないからである。

ただ、そこで描かれる「現実」はルポルタージュで報告されるそれではないために、貧困や格差がそのまま表出されるとはかぎらない。遠野りりこ『工場のガールズファイト』（メディアファクトリー 二〇〇九年）のように、若者の労働現場を主題に扱う青春小説はたしかに増えているけれども、思春期向けライトノベルやマンガで描かれる「現実」(リアルな世界)はそうしたすがたでないことの方が多い。「男の子」向け作品では萌え系列のものが主流であり、ケイタイ小説の世界では、やはり、恋愛物語が中心、少女小説では九〇年代から広がったファンタジーが大きな部分を占める。高校在学時からアルバイトに追われる低所得層の子どもたちにとって、ケイタイ小説の恋愛物語が慰めになっても、貧困の実態をつたえるだけのお話は魅力がないにちがいない。自分たちが生きている世界を格差や貧困、差別という観念によって括られても、そこにいるしかない子